Hamlet 劇における Gertrude

Gertrude in *Hamlet*

高山　浩子 *
Hiroko Takayama

1．序

Hamlet 劇に登場してくる女性は，Shakespeare のほかの多くの作品の場合と同様に，必ずしも知性的に描かれてはいない．Hamlet の母親 Gertrude も，非常に単純で思慮の足りない女性のように描出されている．世の中の母親が一般にそうであるように，子を想う気持ちは強く持っていても，彼女にはついと愛情の波に流されてしまうような脆さがみられる．

この劇の中での主人公は，言うまでもなく Hamlet その人であるが，彼の心に生じる悩みの一部分は，母親の行動に起因している．彼にとって，Gertrude は尊敬すべき母親でありながら，その思慮分別の足りなさが，悩みの種になっているのであるが，Gertrude の方は Hamlet に責められるまで，そのことを深く考えないでいる．*Hamlet* 劇では，そうした母親の弱さが悲劇性の一因となっているのである．もし Gertrude が *A Merchant of Venice* の Portia のように，賢明な女性であったら，劇そのものの悲劇性は弱められるであろう．

ところで，Gertrude が実際に *Hamlet* 劇でどのような役割を果たしているのか調べることも，この劇を理解する上で重要なことのように思われる．そこで本稿では，Gertrude のどのような性格が問題になるのか考察していく。そして彼女がこの劇で演じている役割を明らかにしようと思う．それゆえ，Shakespeare の悲劇が性格悲劇であるという観点から見れば，その悲劇性に彼女の性格がどのように関わってくるか明白になるであろう．

2．Gertrude の単純さ

Shakespeare は，Portia のような女性をあまり登場させてはいない．多くの女性の登場人物が極めて物事を浅く考える．Hamlet の場合はあまりに深く沈思してしまうけれど，それと比べると Ophelia も Gertrude も目先のことしか考えない女性として描かれている．

Granville-Barker の言うように，Gertrude は絶えず Claudius 王と共にあり，王の影の中で動いている．Gertrude は先王の死後，まるで魔法にかけられたように Claudius の思うままになってしまう．彼女は Hamlet を説得するように王と Polonius に頼まれたときだけ王から離れている．ここで彼女は Hamlet の説得力のある話を聞き，やっと自己の存在を意識するのである．[1)]

Gertrude が初めて登場してくるのは 1 幕 2

* 一般教育等

場で，デンマークのエルシノア城の広間に，Claudius 王と共に正装して現われる．Hamlet がそこへ登場して，憂鬱そうな顔をしているのを Gertrude が見とがめてこう言う．

Good Hamlet cast thy nighted colour off,
And let thine eye look like a friend on Denmark,
Do not forever with thy vailèd lids
Seek for thy noble father in the dust.
Thou know'st 'tis common, all that lives must die,
Passing through nature to eternity.[2)]
〔I．ii. 68－73〕

すると Hamlet はこう答える．

Ay madam, it is common.
〔I．ii. 74〕

素直な答なので，それでは何故 Hamlet がふさいだ様子をしているのかわからずに，聞きただすのである．

If it be,
Why seems it so particular with thee?
〔I．ii. 74－75〕

Hamlet の答を引用するまでもなく，先王の死後ふた月ほどで王妃が別の男性と結婚するのは不自然なことのように思われるが，当の Gertrude には，そんな疑問はないようである．彼女は Claudius の言うままにしたに過ぎない．国王の不在は確かにデンマークのためにはよくないことであろうが，成人した息子がいるのであるから，王位継承は当然 Hamlet がなすべきものであると思われるけれど，実力者の Claudius が実権を握ってしまった．そういう息子の不利益も，民衆の意見も，このときの Gertrude には全然わからないのである．

Gertrude の自己中心的な思考態度は，息子 Hamlet のみに限らず，実は夫たる Claudius 王についても言えることである．彼女は夫の考えや苦しみをまったく理解できない女性として描かれている．Macbeth の妻のように，悪事の主導権を握るほどの女性ではなくとも，夫の考えていることを少しでも理解できる女性であったら，事の善悪を判断できたであろうが，そういうことは，Gertrude には求められない．彼女は，周囲にほとんど無頓着なのである．そこで，3幕2場で Hamlet が劇中劇で役者に演じさせた国王毒殺の場面に，Claudius が思わず不機嫌になって立ち去ろうとするときにも，彼女には何が何だかまったく理由がつかめずぼう然としてしまう．

Gertrude は邪悪な心などなく，人殺しなどまったく考えられない女性である．しかし，彼女は優しく官能的であり，感性が鈍くて浅薄であると Bradly は考えている．[3)]

Gertrude は周囲のいろいろな事情を知ろうとはしない．Claudius に口説かれると，他愛もなくその気になってしまう．夫の死後で心がふさいでいるのが普通であるが，いくら巧みに口説かれたとはいっても，夫の喪も過ぎないうちに早々と再婚しても，台詞の上からは何のうしろめたさも響いてこない．彼女は何も悔いることがないのであろう．Hamlet が3幕4場で母親を責める台詞を聞くまでもなく，Gertrude の行動には思慮が欠けているように思われる．Hamlet は人一倍潔癖で，母親がみだらな行動をしていると思うのであるが，一般読者あるいは観客の眼から見ても，Gertrude にはたいへん思慮が足りないように見える．

Gertrude は極めて単純な思考しかない．Hamlet の狂気は Ophelia が原因とする Polonius の話を信じてしまう．Doren が指摘するように，彼女も自分のあまりにも性急な再婚が彼の狂気の原因と思っているが，その原因は Ophelia らしいという Polonius の言葉に彼女は同意してしまう．[4)]

この驚くべき単純性を，Shakespeare は

Gertrude という人物に与え，彼女を王妃として，妻として，母親として登場させているのである．

Gertrude は何も疑うようなことをしないし，何も疑問をもたない．もし疑問をもったとしても，Hamlet のように深く追求しない．それゆえ，Claudius が Hamlet を毒殺しようとして毒を入れたグラスを用意しても，夫のそのような心の動きに全然気がついていない．そのため，その毒杯を飲むことになってしまう．5幕2場での王妃の悲鳴は夫に対する最初で最期の恨みであろう．

No, no, the drink, the drink—O my dear Hamlet—
The drink, the drink—I am poisoned.
〔Dies〕〔V. ii. 289—290〕

Hamlet と Claudius がそれぞれ頭の中で考えつつ語り，激しい行動となってそれが表わされても，Gertrude にはこの二人の意識には入っていけないし，またそれを理解する術がない．感受性が鈍いと言えばそれまでであるが，この両者の間にあって，5幕2場に至るまでは無風状態でいる．激しい感情の渦巻く中で，それを感じられない女性として Gertrude は描かれているのである．

これは Hamlet の感情の鋭さとは，まったく正反対に思われるであろう．Shakespeare は実に思い切った親子の性格描写をしているといえる．

3．愛情を求めて

先王 Hamlet が在世のとき，Gertrudeは幸福であった．それは正しい秩序の保たれている国の王妃として，夫の愛情を充分に受けていたからである．先王 Hamlet は Claudius とはまったく違う性格の持ち主のように思われる．1幕2場の Hamlet の台詞が，これを物語っている．

That it should come to this!
But two months dead—nay not so much, not two—
So excellent a king, that was to this
Hyperion to a satyr, so loving to my mother
That he might not beteem the winds of heaven
Visit her face too roughly—heaven and earth,
Must I remember ?
〔I. ii. 137—143〕

先王 Hamlet は妃の顔に当る風さえ気にかけていたというほど，妃のことを考えていたのである．このように，こまやかな愛情の持ち主である先王は，亡霊となって Hamlet の前に現れてまでも，妃のことを気にしている．3幕4場で，先王 Hamlet の亡霊はこう言うのである．

Do not forget. This visitation
Is but to whet thy almost blunted purpose.
But look, amazement on thy mother sits.
Oh step between her and her fighting soul:
Conceit in weakest bodies strongest works.
Speak to her, Hamlet.
〔III. iv. 109—114〕

こういう台詞から判断する限り．やはり先王は Gertrude に深い愛情を持っていたと考えられよう．

だが，先王が死んで寂しい生活を送っている Gertrude には，何か感情のどこかに大きな穴があいたようで，言葉巧みな Claudius の求愛に，他愛もなく屈してしまうのである．そのことを知っている先王の亡霊は，こう言ってくや

しがる.

Ay, that incestuous, that adulterate beast,
With witchcraft of his wits, with traitorous gifts—
O wicked wit and gifts that have the power
So to seduce—won to his shameful lust
The will of my most seeming virtuous queen.
O Hamlet, what a falling off was there,
From me whose love was of that dignity
That it went hand in hand even with the vow
I made to her in marriage, and to decline
Upon wretch whose natural gifts were poor
To those of mine.　〔I. v. 41—52〕

彼は Gertrude の愛情が自分から離れてしまったことを嘆き，自分の愛情は最初から変わらなかったことを息子 Hamlet に切々と訴えるのであった.

Gertrude はつまり，独自性のない女性であった．愛情を絶えず求めているようにも思われる．誰か頼れる人が欲しいのであろう．しかし，デンマークの国王の妃という身分からは，先王の弟であれば妥当であると思ったのかも知れない．Shakespeare はここで，「弱き者よ，汝の名は女なり」という命題を誇張して Gertrude に適用しているのであろう．事実，1幕2場での Hamlet の台詞は，それを物語っている.

Let me not think on't; frailty, thy name is woman—
A little month, or ere those shoes were old
With which she followed my poor father's body
Like Niobe, all tears, why she, even she—
O God, a beast that wants discourse of reason
Would have mourned longer—married with my uncle,
My father's brother, but no more like my father
Than I to Hercules—within a month,
Ere yet the salt of most unrighteous tears
Had left the flushing in her galled eyes,
She married.　〔I. ii. 146—156〕

息子のこうした想いは，母親にはわからない．彼女は Claudius から愛情を受けていると思っているので，先王の没後1ヶ月で結婚しても，気持ちの上での不自然さは残っていないようである．もし彼女にそうしたことを思慮する気持ちがあれば，当然 Hamlet の憂鬱の原因に思い当たるはずであろうし，彼女の側から息子に何らかの釈明の言葉をかけていたはずである．ところが，台詞に見られる限りでは，彼女にはそうしたうしろ目たさは見当らない．3幕4場で，息子に真剣に道理を説かれると，はじめて気がつくのである.

Hamlet は Gertrude を先王の肖像画のところへ連れて行き，先王が如何に優れた人物であったかを思いながらこう言う.

Look here upon this picture, and on this,
The counterfeit presentment of two brothers.
See what a grace was seated on this brow;
Hyperion's curls, the front of Jove himself,
An eye like Mars, to threaten and

command;
A station like the herald Mercury,
New-lighted on a heaven-kissing hill;
A combination and a form indeed,
Where every god did seem to set his seal
To give the world assurance of a man.
〔III. iv. 53－62〕

それから Hamlet は，母親に Claudius 王の肖像画を見せ，先王の絵と比較しながらこう述べる．

This was your husband. Look you now what follows.
Here is your husband, like a mildewed ear
Blasting his wholesome brother. Have you eyes?
Could you on this fair mountain leave to feed
And batten on this moor? Ha! have you eyes?
You cannot call it love, for at your age
The heyday in the blood is tame, it's humble,
And waits upon the judgement; and what judgement
Would step from this to this?
〔III. iv. 63－71〕

Hamlet は Gertrude が間違った愛情を持っていると考える．それは愛と言えるものではなくて，Gertrude が色情に迷っていることを示すものだと思っているのである．Gertrude には正しい判断ができないのであるが，それは彼女の脆い性格にある．

Hamlet はさらに，Gertrude の感覚が正常ではないことを説く．

[Sense sure you have,
Else could you not have motion, but sure that sense
Is apoplexed, for madness would not err,
Nor sense to ecstasy was ne'er so thralled,
But it reserved some quantity of choice
To serve in such a difference.] What devil was't
That this hath cozened you at hoodman-blind?
[Eyes without feeling, feeling without sight,
Ears without hands or eyes, smelling sans all,
Or but a sickly part of one true sense
Could not so mope.] 〔III. iv. 71－81〕

このように息子に詰問されて，Gertrude にはじめて後悔の念が起こってくる．誤った感覚に導かれていたことに気づくのであるが，それはそれまで，何とか理屈をつけて自分なりに納得していたものが，白日のもとに晒されることでもあった．

Hamlet の追求はまた続く．

O shame, where is thy blush? Rebellious hell,
If thou canst mutine in a matron's bones,
To flaming youth let virtue be as wax
And melt in her own fire. Proclaim no shame
When the compulsive ardour give the charge,
Since frost itself as actively doth burn,
And reason panders will.
〔III. iv. 82－88〕

ここで Gertrude は，思わず Hamlet の言

葉を遮ってこう叫ぶ.

O Hamlet, speak no more.
Thou turn'st my eyes into my very soul,
And there I see such black and grained spots
As will not leave their tinct.
〔III. iv. 88－91〕

彼女は Hamlet に自分の心の奥にあるものを暴露されたように思う. いままでは考えてもみなかったし, また, 考えようともしなかったことであるが, 息子に言われると心に重くのしかかるのであった.

Hamlet がさらに続けて責めようとすると, Gertrude はもう耐え切れなくなって, またこう叫ぶ.

Oh speak to me no more.
These words like daggers enter in my ears.
No more sweet Hamlet.
〔III. iv. 94－96〕

こうして Gertrude は, 自分が愛情だと思っていたことが, 誤りであることを息子に指摘されて, それに気づくのであるが, 本来ならば当然, 自らが恥ずべきことである. しかし, 愛情の拠り所を求めている Gertrude には, それまで気づく術がなかったと言えるであろう.

4. 客観的に自己を見られない性格

Gertrude は愛情に飢えていたとは言いきれないが, 彼女が誰かに, あるいは何かに頼りたい気持ちは確かにあったと言える. しかし先王亡き後, デンマーク王妃として Hamlet を盛り立てて国政を切り盛りできるほどの政治的, 外交的手段を彼女に求めることは無理であろう. 彼女は絶えず夫の被護のもとにあったといえる.

彼女には, 自分で考えて自らの意志で行動することは得意ではなく, いつも誰かに, とくに夫に寄り添って生きている. したがって, 彼女には独自性が欠けていると言われても仕方がないであろう. 1幕5場で, そういう妃の浅はかさを先王の亡霊は嘆いている.

But virtue as it never will be moved,
Though lewdness court it in a shape of heaven,
So lust, though to a radiant angel linked,
Will sate itself in a celestial bed.
And prey on garbage. 〔I. v. 53－57〕

つまり, 夫がいくら気高い人物であっても, 自主性のない妻はそばに夫がいなければついと下等な欲望に誘われてしまうということを, 亡霊は嘆いているのである.

Gertrude にもう少し自分を見る目があれば, おそらく Claudius が望んでいたことは不自然であることがわかったであろう. しかし, 彼女にはそうした慧(けい)眼はない. 自分の信念を拠り所として物事を考えないので, 端目には非常にうわついた女性のように見える. とくに息子にとってみれば, 母親のそうした独自性のなさが, 眼に余って仕方がないのである.

Hamlet は母親の性格をなじる前に旅回りの劇団に芝居で演じさせて王妃を演じる役者に, Shakespeare はこう台詞を言わせている.

PLAYER QUEEN So many journeys may the sun and moon
Make us again count o'er ere love be done.
But woe is me, you are so sick of late,
So far from cheer and from your former state,
That I distrust you. Yet though I distrust,
Discomfort you my lord it nothing

must.
For women's fear and love hold quanity,
In neither aught, or in extremity.
〔Ⅲ. ii. 142－149〕

ここでの王妃が言う女性の習性として，心配と愛とは，共に常にあるかないかのどちらかであるという．このことは，心配と愛情とが大きな相関があって，愛していればいるほど気掛かりに思うということである．

この言葉の裏を返すと，先王の他界後は，先王よりも Claudius に生きる力を見出した妃にとって，先王はもう心配しなくていい人であり，したがって，先王に対する愛情はもうないものと理解されても仕方がない必然性がある．それは彼女が，先王の死後１ヶ月で再婚したという不自然さがあるからである．そのことを，劇中劇の王妃は次のように表現している．

Now what my love is, proof hath made you know;
And as my love is sized, my fear is so.
[Where love is great, the littlest doubts are fear;
Where little fears grow great, great love grows there.]
〔Ⅲ. ii. 150 －153〕

そしてさらに，もし夫が死んでも二度と夫を持つことはないと誓うのである．そして次のように言う．

PLAYER QUEEN The instances that second marriage move,
Are base respects of thrift, but none of love.
A second time I like my husband dead
When second husband kisses me in bed.
〔Ⅲ. ii. 163 －166〕

このように，劇中劇で王妃が王に貞節であることを誓うのを聞いて，Gertrude はただこの劇の王妃は誓い過ぎるとだけ言い，自分の現状を考えている形跡はまったくない．彼女は３幕４場で息子に責められるまで，まったくこのことを考えようとしないし，理解しようともしない．

Hamlet の意図は，芝居で先王の亡霊が言ったことを再現して，Claudius 王の反応を見ることであったし，そのために友人の Horatio にも特別に王を観察する役目を頼んでいる．しかしもう一方において，劇中劇の妃が王に誓う台詞で，王妃にも反省を求める意図もあったように思われる．しかしながら王妃は，その台詞を聞いてすら，他人事として考え，自分の身と較べてみようとはしない．このあたりにも，王妃の思慮の足りなさがみられると共に，彼女は物事を浅くしか考えずに，いわば流れのままに身を任せている．

Hamlet は周囲によく気づくし，周囲の人をよく観察しているが，王妃は人の行動などまるで眼中にない．こうした両者の感受性の違いが，考え方のずれを起こしている．母と子であるから，もう少し性格が似ていてもいいように思われるであろうが，実の親子でもまったく性格は違うことが多いので，この点では作者 Shakespeare を責めるわけにはいかない．

すなわち、人間の性格は多様であって，それがその人の行動を決め，運命を決めることになるとする，Shakespeare 独特の性格運命論を，読者も観客も理解することが重要なのであろう．

5．母性愛

Gertrude は王妃であり，Hamlet の母である．王位を簒奪した Claudius ではあっても，彼の妃を思う心はとにかく本物のように考えられる．したがって Gertrude は新王から愛されていたと思われるが，その動機は不純である．Claudius は Gertrude に横恋慕したのであり，

そのため彼は兄である Hamlet 王を殺し，王冠と妃とを同時に手に入れたのである．しかし，Gertrude の立場は非常に微妙であって，彼女が王の死に関して何も知らないというところが，むしろ救いになっている．したがって，悪事を知らない彼女には罪はないという見方も出来るかも知れないが，しかし客観的には不自然なことが多い．

ところで Claudius は Laertes が Hamlet に対する処置が手ぬるいというのにこう答えている．

CLAUDIUS Oh for two special reasons,
Which may to you perhaps seem much unsinewed,
But yet to me they're strong. The queen his mother
Lives almost by his looks, and for myself,
My virtue or my plague,be it either which,
She's so conjunctive to my life and soul,
That as the star moves not but in his sphere,
I could not but by her.
〔IV. vii . 9－16〕

つまり Gertrude は Hamlet が可愛くて仕方がないのであり，Claudius も彼女の幸せのために，これまで彼女の息子に対する愛情を大目に見ていた．劇中劇の伯爵 Gonzago の妻 Baptista は，夫が毒殺されたあと，その殺人者 Lucianus と再婚するのであるが，その Baptista と同じ道を彼女は歩いている．先王の死後，先王に対する愛情は忘れられてしまったのであろうが，現に存在している我が子に対する愛情は残っている．いや，残っていると言うよりは，初めから変わらず強く存在していると言った方がいい．というのは，3幕4場で息子 Hamlet が狂人ではないことがわかっても，他人にはそのことを言わなかったし，Hamlet が王を愛するのならば自分が狂人を装っていることを王に告げ口してもいいと言ったときにも，Gertrude は誓ってそんなことはしないと言った．

このことを裏返すと，結局，彼女の再婚相手の夫に対する愛情よりも，息子に対する愛情の方が強かったと言える．その限りでは，Gertrude は子供思いの母親であったと言ってもよいであろう．

Gertrude は，実際に息子思いであった．彼女はときどき Hamlet のことを心配している．世の母親の常であろうが，息子の行動が気になるし，いつも傍にいてもらいたいのである．Hamlet が先王の葬儀と新王の戴冠式が済んだので，Witenberg に再び留学したいと言うのを聞いて，Gertrude は彼にこう言う．

GERTRUDE Let not thy mother lose her prayers Hamlet.
I pray thee stay with us, go not to Wittenberg. 〔I. ii. 118 －119〕

息子に是非とも思いとどまってもらいたいと彼女は思う．独り息子を遠い所にやりたくはないのである．

そこで彼女は

HAMLET I shall in all my best obey you madam. 〔I. ii. 120〕

という息子の返事を聞いて，まずはほっとするのである．Hamlet には母親を安心させる意図もあったであろうが，もちろん事の真相を探るためにエルシノアにとどまるつもりであることを，母親は知らない．

2幕2場で王妃が Rosencrantz と Guildenstern に会ったときに語る言葉にも，息子への愛情がにじんでいる．

GERTRUDE Thanks Guildenstern, and gentle Rosencrantz.
And I beseech you instantly to visit
My too much changed son. Go some of you
And bring these gentlemen where Hamlet is.
GUILDENSTERN Heavens make our presence and our practices
Pleasant and helpful to him.
GERTRUDE Ay, amen.
〔II. ii. 34－39〕

Gertrude の台詞には，気が狂って変わり果てた息子が，何とか正気に戻ってくれないかと思う気持ちが溢れている．旧友と語り合えば息子の気持ちが落ち着くのではないかとも考える．そこで Guildenstern の言葉を聞いて，感謝の感情が湧いてくるのである．息子の悩みの真相を探ろうとはしないで，息子の表面的な行動の変化だけを彼女は見とがめているのである．これも子を思う親心の現われであろう．

王妃の息子を思う気持ちは，この二名の友人への依頼にとどまらず，Ophelia にも及ぶ．もっとも Ophelia こそ息子の狂気の原因であると思っている彼女のことであるから，Ophelia との仲がうまくいけば息子の狂気も戻るかもしれないという期待はあって当然であろう．

3幕1場での Gertrude の台詞にも，そうした息子への愛情がにじんでいるように思われる．

GERTRUDE I shall obey you.
And for your part Ophelia, I do wish
That your good beauties be the happy cause
Of Hamlet's wildness. So shall I hope your virtues
Will bring him to his wonted way again,
To both your honours.
〔III. i. 37－42〕

もし Ophelia が息子に愛情と理解とを示してくれれば，息子の気持ちが柔らいで，心のわだかまりが解け，正気になってくれるであろうと Gertrude は考える．Gertrude は，Ophelia が実は Hamlet の味方ではなくて，その父親 Polonius の操り人形だということに気づいていない．そして息子を救えるのはその狂気の元が消えることが一番であると彼女は思うのであろう．そこで Ophelia の "Madom, I wish it may." という言葉を聞いて安心して退場する．

このように考えてみると，Gertrude は人並みの母親として我が子の身の上を心配している女性である．つまり，子に対する愛情には深いものがあるといえよう．

6．悔　恨

ほとんど何も考えずに再婚したように思われる Gertrude も，息子からいろいろと言われると成程と思うようになる．3幕4場は，そうした彼女の自己認識の場でもある．Hamlet が強く感じていた恥辱と疑惑を，Gertrude にはどうしても感じられなかったのであろう．この理由は，これまでもたびたび触れたように，彼女自身の性格にある．思考が常に自己だけに向けられ，しかも本能的なところだけに強く作用する．拠りかかれる者を求めることもその一つであるが，本質的に先王と Claudius との峻別ができない．夫である人の性格に何も望んでいないし何も期待していない．川の流れに身を任せたように成行き任せである．また，子供への愛情という点でも，盲目的である．Hamlet の言動を心配してはいても，その原因をはっきり知ろうとする努力はしない．しかし，一般の母親が見せる母性本能がそこに見られる．

このような平凡な母親像が描かれていると同時に，妻としての何も考えない貞節さも描かれている．Gertrude が誤った道を歩いているこ

とは，本人にはわからないのであるが，3幕4場での Hamlet の激しい言葉で，彼女はやっと自分のしてきた行動に反省の眼を向ける．そして，自分の行動に対して良心の呵責を受けることになるのである．この事は，1幕2場で，先王Hamletの亡霊が述べていたことでもある．つまり，この愛情深い王は，死後の世界からさえ，息子が Gertrude を責めて，彼女に危害を加えることがないように言うのである．

> But howsomever thou pursues this act
> Taint not thy mind, nor let thy soul contrive
> Against thy mother aught. Leave her to heaven
> And to those thorns that in her bosom lodge
> To prick and sting her.
> 〔I．v．84－88〕

先王の亡霊は，自分の妻の罪を彼女自身に認めさせ，その心の中で後悔の念に悩むことを望んでいるのである．ここにも先王の愛情の一端が伺える．

3幕4場で Hamlet に言葉で責められた Gertrude は，自分の愚かさに初めて気がつく．彼女は心が痛むあまり，思わずこう言うのである．

> Oh Hamlet, thou hast cleft my heart in twain.　〔Ⅲ．iv．157〕

こうして Gertrude は気を取り直し，次の4幕1場での Claudius との対話となる．ここでは息子の狂気を語っていて，息子との約束は守っている．

Hamlet に強く言われて正邪の区別がつくようになった母親は，夫が Hamlet のために用意した毒杯を誤って飲んだとき，そのことを息子に苦しい息の下から知らせるのであった．Gertrude は Hamlet に現在の夫が悪人だと言われても，現実に毒を飲むまで，あまり夫の行動を警戒する様子もないが，これも Gertrude には理解できないことであったのであろう．

7．結　論

これまで見てきたように，Gertrude はこの劇ではむしろ脇役であるけれど，Hamlet に優柔不断の気持ちを起こさせる一因であった．つまり，親思いの息子は，母親の夫を殺すことを多少躊躇したことと思われる．その意味では，Hamlet の性格を際立たせるのに母親の存在が役立っているように思われる．

Shakespeare は Gertrude にはごく平凡な女性のイメージを与えているが，これは彼の女性観によるものであろう．性格が悲劇を生み出すという考え方からすれば，Gertrude の性格はまさに彼女の道を誤らせていると思われる．彼女はごく単純な女性であり，あまり多くを考えない．思考が自己中心で周囲に及ばないため，自分の行動が世間や息子の目にどう映るかなどは考えてもみない．息子にせめられる3幕4場でも，最初は何故 Hamlet がそれほど強く自分を非難するのかわからないで，まごまごしている．思慮分別の足りないのは Ophelia も同じであるが，Ophelia と違って彼女には Hamlet に対する愛情があった．それは子を思う母親の愛情であって，普通の母親のそれである．

しかし Gertrude は単純な性格であるので，独自性に乏しく，夫に頼って生きていく女性でもあった．それゆえ，Claudius の王位に就きたいための甘言を愛情と取り違えて解釈し，ついに身を滅ぼしてしまう．Gertrude は決して自らの意志で行動するタイプの女性ではなかったのである．そのため彼女は絶えず夫の言うままに行動し，次には息子に諭(さと)されて，またそのように行動する．自己の意志を持たない女性の悲劇を Shakespeare は描いている．

しかし，そういう Gertrude でも，良心は死んでしまったわけではなかった．亡霊の言う

ように，Hamlet の言葉で心の中では悩むのである．しかし，Hamlet の悩みの解決に手を貸すほどの心の動きはまったくない．

このように，Gertrude は *Hamlet* 劇の中では積極的な役割を果たしているとは言えないけれど，*Hamlet* 劇の悲劇性を盛り立てるために，先王と Claudius と Hamlet という人々の間で，ついには悩みながら殺されていく可哀そうな女性として描かれていて，*Hamlet* 劇をより感銘深い悲劇に仕立てる人物として，きわめて貢献していると言えるであろう．

したがって，Gertrude が *Hamlet* 劇で果たしている役割は，それなりに意味があるといえる．とくに主人公 Hamlet は，父の仇討ちをしようとする心の中のどこかで，母親 Gertrude のことを考えていたに相違なく，そのため行動が鈍ることにもなる．そこに Hamlet の Oedipus complex を見出そうとする試みさえ考えられている．何といっても実の母と子であるので，その絆は堅い．それゆえ，Hamletの心に Gertrude が深く影を落としていると言っても過言ではなく，それゆえ彼女の存在価値もそこにあると考えられる．

このように考えると，Gertrude は脇役ではあっても，*Hamlet* 劇にはやはり欠かすことのできない登場人物であるといえる．

注

1）Harley Granville-Barker, *Preface to Shakespeare*, Third Series *Hamlet* (London: Sidgwick & Jackson,Ltd., 1937),p.284.

2）本稿の text の引用にはすべて Cambridge 版 The New Cambridge Shakespeare シリーズ，*Hamlet* による．

3）A.C.Bradley, *Shakespearean Tragedy* (London:Macmillan & CO.Ltd.,1920). p.167.

4）Mark V. Doren, *Shakespeare* (London: George Allen & Unwin, Ltd.,1941), p.193.